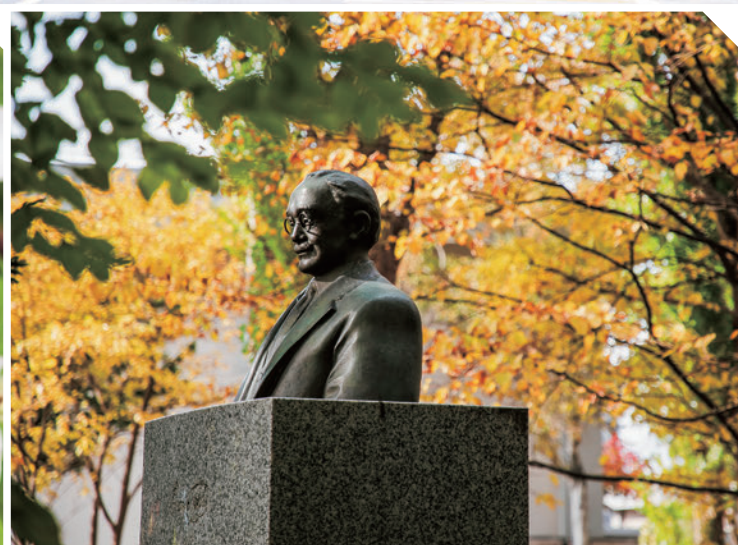




北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク誌

ACROSS

2025年12月1日発行

No. 6

〈目次〉

1. 巻頭言「Across the Bridge」
2. 元北海道大学校友会エルク会長より
「新渡戸カレッジを世界のモデルに」
同窓生の近況
3. 教育プログラム紹介
——学部カリキュラム
4. 教育プログラム紹介
——大学院カリキュラム
5. 新渡戸カレッジの現況
6. フェロー・メンターの紹介
7. 教員からのメッセージと紹介
北海道大学創基 150 周年記念
募金のご案内



①中央ローン
②イチョウ並木
③エンレイソウ
④新渡戸稲造博士顕彰碑

Across the Bridge

北海道大学新渡戸カレッジ副校長
文学研究院 教授
LA FAY Michelle



In Nitobe College, we often repeat Nitobe Inazo's famous statement, "I want to be a bridge across the Pacific." Nitobe Inazo put forth the image of himself as the bridge as he connects Japan and countries on the other side of the Pacific. Now, of course, we imagine Nitobe's bridge not only spanning the Pacific but leading us to countries around the world.

Nitobe provided us with this image of himself as a bridge, but he also experienced life on the other side of the Pacific and, later, on the other side of the Atlantic as he traveled to Germany to study. What did he find on the other side of these oceans?

From my own experience of crossing the Pacific, I found my host family waiting for me at the airport. I found people that I could relate to and found communities to support me. Thanks to my connections in Japan, I also found new communities in the US.

Nitobe also found communities of people that he felt comfortable with, and these communities became the basis of his future life. After he returned to Japan, he found a new community with students in his role as a teacher at Sapporo Agricultural College.

As the COVID pandemic came to a close, many of us have found that our circles of interaction have grown quite small. We became complacent with staying at home or being alone. However, maintaining our connections to other people is an important aspect of our lives. Communities reinforce those connections and provide a variety of ways to participate in society.

Nitobe College has become an important community at Hokkaido University connecting people across academic fields and across borders. Our alumni magazine, ACROSS, is our way of reaching out to our extended community of graduates, Fellows, and people who are interested in our endeavors.

For current members of Nitobe College, I hope that you will find a community that will support you and provide a safe space for you to navigate university life, the ups and downs of your studies and research, and your future career. For graduates of Nitobe College, I hope that what you learned in Nitobe College has helped you find new communities in your current life. We also would like to extend a welcome to anyone who is interested in Nitobe College. We hope to be an active part of society in Japan and around the world.

元北海道大学校友会エルム会長より 『新渡戸カレッジを世界のモデルに』



杉江和男

共立女子学園常勤監事
(公財)産業教育振興中央会理事長
元校友会エルム会長
元新渡戸カレッジ副校長
元DIC株式会社社長・会長

新渡戸カレッジ発足の当初、教員とフェローがその運営を協議する場において、入校者の選抜方法を尋ねたところ、英語の成績で定員にしたと言う。英語力とリーダーシップは関係ないと述べると、それ以外の選抜方法が無かったとの返事であった。私には、グローバルよりもリーダーの方が難しくて大切であり、本当にリーダーシップを身に付けるプログラムかと疑った。

地球、世界、そして社会は毎日、変化している。人は誰でも生き甲斐、働き甲斐を求めている。残念ながらこの36年、先進国で日本だけが変化をチャンスに捉えられなかった。リーダーと言える人も数少ない。日本人は、礼儀正しく勤勉で、謙虚で思いやりが深いことで世界に評価されている。でも、自己主張が足りないからリーダーが生まれないのか？ そんな単純なことではない。

新渡戸カレッジの学びは、原点にある教育の使命を貫いて欲しい。何事も、その本質に目を向けて正しい目標を定め、多様な意見を聞いて議論し、相手を理解して容認し、お互いの知恵を持ち寄って目標達成のため、自らの意志で一緒に行動するフォロワーができる人、それがリーダーです。人格に欠ける人には、地位と報酬でしか人は集まらない。でも彼らはフォロワーではない。

リーダーシップは教科目ではなくて学び働く心の持ち方です。アクティブラーニングが上手でも、海外をちょっと見てもリーダーには成れない。指導に当たるフェローは、リーダーでなければ役割を果たせない。新渡戸カレッジはそんな人間形成の場として、これから進化し続けられれば、きっと世界のモデルになると信じている。

好きな化学を専攻して就職した時、自分が研究した製品の工場を作ることが夢でした。社会に役立つ商品であれば、研究テーマや職種などに余り拘りは無かった。それから40年、化学企業を経営する傍ら、経済団体のキャリア教育の委員会を担当したことがきっかけで、多くの公的・私的機関や団体で、教育、人材育成、そして組織の創生に関わる機会を得ることになった。

一方、北大がグローバルリーダー育成を目指す新渡戸カレッジは12年前に開校した。遠い昔、大学教員を目指したが叶わなかった夢を思い起こし、ワクワクして初年度のフェローに手を挙げた。

◆ 同窓生の近況 ◆

新渡戸カレッジを 振り返って

荒 幹彦

Analyst at Ampere Analysis

2022年3月学部教育コース修了



北大文学部を卒業後、London School of EconomicsでMSc Sociologyを取得。その後、ロンドンのAmpere Analysisでアナリストとして働いています。主に各国の放送局、規制当局、ストリーミングサービスや銀行などに市場調査とコンサルティングを提供しています。

新渡戸カレッジでの日々を振り返ってみて、今の自分の糧になっていることの一つは経験豊富なフェローのお話です。例えば、海外子会社の経営を任せられ現地の人のマネジメントに苦労されたお話、多くの部署を経験して自身の適性・不適性を感じながらキャリアを積んできたお話です。フェローの方々も未経験のことを手探りで挑戦し、自分の経験にしてきたというお話は、私が海外で働いていて、どこを目指すべきなのか、将来このままイギリスにいたいのか、アメリカや他の国に行くのか、日本に帰ったらどのようなキャリアになるのかといった未知の不安を和らげてくれます。そんなお話を思い出すと不安でもなんとかかなりそんな気がしてきます。

私にとって5年後の職業、居住地、目指す人生像は未だ揺らめいていますが、気楽に頑張っていこうと思います。

未来(あす)へと繋がる 新渡戸カレッジでの学び

岡 睦基

旭化成株式会社

2022年9月大学院教育コース(基礎)修了
2023年3月大学院教育コース(オナース)修了



北海道大学大学院総合化学院を修了し、旭化成株式会社にてウイルス除去フィルターの製造プロセス開発を行っています。研究活動以外の事にもチャレンジしたいと思い、ラボの掲示板に貼ってあった入校募集のチラシを見て、入校を希望しました。

当時を振り返ってみると、新渡戸カレッジには様々なバックグラウンドや専門性を持った素敵な仲間が沢山いました。その仲間たちと課題解決のため共に協力し、時には悩み、お互いを尊敬し高め合う経験が出来たことは、大変貴重でした。

工業製品の製造プロセスの開発は、最終製品に求められる品質を満たしつつも、製造従事者への負担や安全性を考慮する必要があります。多くの要求事項が存在する難しくもやりがいのある業務です。勿論、自分一人でこれらの業務全てを行うことは不可能なため、社内の様々な方とチームを組み、協力し合う必要があります。そのチームの中で、自分の強みを活かしリーダーシップを発揮し、目標へと向かっていくことは、新渡戸カレッジにて実践してきたことそのものではないでしょうか。

新渡戸カレッジでの経験は、社会において強い武器になることを実感できました。自分をアップデートし続け、課題を解決し新たな価値を生み出すことのできる人財を目指していきたいと思っています。



■グローバル基礎科目

グローバル基礎科目は第1学期の春ターム（国際理解と海外留学）と夏ターム（リーダーシップとチームワーク）に提供されている全学教育科目で全学生が履修可能になっています。春タームでは、海外経験の豊富な講師から、国際社会における課題や各研究分野の状況、留学の実態についての講義を受け、自分自身の留学について考える機会を得ました。夏タームは、札幌市まちづくり政策局に提供していただいた「札幌市の人口減少」という課題について、学生がチームでチューターの説明と助言でディスカッションや発表のための実践的なスキルを磨き、自ら望ましいリーダーシップを発揮しました。最後に代表チームの発表に対して、札幌市まちづくり政策局からコメントをいただきました。



■新渡戸学（フェローゼミ）

フェローゼミは学部カリキュラムの必修科目として位置づけられ、フェローの指導のもと、少人数のグループで現代社会の課題解決に取り組む授業です。2024年度は6つのテーマに分かれて活発な議論と提案を重ね、最終日には公開シンポジウムで各ゼミの代表チームが成果を発表しました。

本ゼミはチューターのサポートに加え、視察先での体験やゲスト講師の講義、教員の助言など、多方面の協力を得て進められています。次年度の最終回は「フェローゼミ報告会」と名称を改め、さらに内容を充実させ、学生の主体的な学びを広く伝える場としていきたいと考えています。



■新渡戸学（セルフキャリア発展ゼミ）

本セミナーは、フェローと学生による集团的伴走支援を中核に、自らの未来を構築する力を養うことを目的としています。2024年5～6月には第1部・第2部をワークショップ形式で実施し、第2部には新渡戸カレッジ卒業生5名（1名は英国からオンライン参加）が加わり、セルフキャリア発展ゼミの経験が現在のキャリアに与えた影響を共有しました。終了後には履修生・チューター・フェロー・教員で北海道大学植物園を訪れ、親睦を深めました。さらに伴走グループを結成し、ゼミ後も継続的に目標実現へ向け研鑽を重ねています。2024年度は対話を重視し、9月のフォローアップセミナーでフェローとの対話を通じて取組を共有・振り返りました。この蓄積があったからこそ、12月の第2回では例年以上に多くの履修生が参加しました。



■海外留学

「海外留学」は新渡戸カレッジ生の国際性涵養を目的とした必修科目で、各学部の状況に応じ、交換留学、国際インターンシップ、学部専門短期留学など、多様なタイプの海外留学プログラムを提供しています。また、学生の自主的な学びのデザインを促進するとともに、合理的配慮を踏まえてカリキュラムを拡大しました。具体的には、オンラインでの留学プログラムの開発や、学外で実施される留学・研修についても、学生申請を審査のうえ条件を満たすものは単位認定対象とし、より幅広い留学機会を提供しています。これにより、2024年度は交換留学28名、国際インターンシップ19名、学部専門短期留学11名、オンライン留学3名、学外留学3名が単位を取得しました。

また、交換留学を経験した新渡戸カレッジ生が相談員となり、留学希望者向けの相談会を実施しました。参加者にとって、相談員の実体験に基づくアドバイスを受けることで、留学への不安を軽減し、より現実的な計画を立てることが可能となりました。本取組は、北大生の海外留学への関心を高め、国際的な視野を育む重要な機会となっており、大学全体の留学促進およびグローバル人材育成の推進に大きく寄与しています。



教育プログラム紹介——大学院カリキュラム

* 2024 年度の様子

2023 年度に着任された 2 名の特任助教により授業実施体制を新たにしたばかりですが、2024 年度からはさらに、新渡戸カレッジのプログラム構成そのものが大きく変更されました。新たな新渡戸カレッジでは、基礎プログラムが廃止されてオナーズプログラムのみとなり、大学院教育コースは「大学院カリキュラム」となりました。また主要 2 科目についても、グローバル発展科目 I および II に名称が変更されました。一方、基礎プログラムで提供されていた 2 科目はプレプログラム科目として全学開放されるとともに、科目名がグローバル実践科目 I および II に変更されました。ここでは、昨年度に実施したこれら 4 科目ならびにメンターフォーラムについて紹介します。

■グローバル実践科目 I・II

——チーム学習の基礎・実践（プレプログラム科目）

グローバル実践科目 I では、オナーズプログラム大学院カリキュラム入校を目指す学生を対象に、同カリキュラムで養成する専門性を課題発見・解決に活かす「3 + 1 の力」の理解を深め、その基礎となる創造的・批判的思考、リーダーシップなどを題材として、チームワーク力を伸ばす授業を重点的に行いました。グローバル実践科目 II では、チームで効果的・効率的に協働するためのプロジェクト・マネジメント（PM）の基礎を学ぶとともに、グローバル実践科目 I で修得した知識・能力および専門職倫理を活かしながら 2 つのプロジェクトを実践することで PM について体得しました。専門職倫理は、前期ではグローバル実践科目 I の、後期では II の授業に取り入れられ、外部講師による講演と課題への取り組みが実施されました。また一昨年度に引き続き、冬タームのプロジェクトの一部について、2024 年 12 月開催の世界冬の都市市長会第 20 回市長会議や 2025 年 2 月開催の北方圏国際シンポジウムで学生による発表も行われました。



■グローバル発展科目 I・II

——課題解決の実践・課題発見の基礎と実践（オナーズプログラム科目）

春タームのグローバル発展科目 I では、「problem with a global dimension」を課題としました。授業を通じて創造的な課題解決の方法や生産的協働のためのチームマネジメントについて学び、これらを活かしながら課題解決に取り組みました。また生成 AI の利用に関するガイダンスやアントレプレナーシップに関する講義を取り入れ、プロジェクトワークに役立てました。秋タームでは、プレプログラム科目を受講せずに大学院カリキュラムのオナーズプログラムに参加する学部教育コースの修了生が参加する可能性を踏まえ、プロジェクトマネジメントに基づく課題解決手法を取り入れました。また起業スキルを育成するために最終プレゼンテーションを「プロジェクト提案」から「ビジネスピッチ」に変更するとともに、ビジネスピッチの重要な要素を授業内で提示する機会を設けました。グローバル発展科目 II では、Promoting Diversity and Sustainability（夏ターム）および Winter Sapporo（冬ターム）をそれぞれ大きなテーマとして設定し、各チームで研究テーマを選定しました。第 4 週に研究計画の発表を行い、その後、第 5 週から 7 週にかけて対面・オンラインでアンケート調査や種々のインタビューなどのフィールドワークを行いました。フィールドワークは各チームが作成した計画に沿って行われ、その進行やチームメンバーの貢献の記録をログの形で残しました。また授業では、社会の第一線で活躍されているメンターやフィールドワークを取り入れた研究者に講演をいただくとともに、プロポーザル・プレゼンテーションへのアドバイスをいただきました。なお、冬タームのプロジェクトは 2023 年度に開始した札幌市国際部との連携の一環として進められました。最終プレゼンテーションは、例年通り一般公開されるとともに、各分野の専門家や札幌市国際部の方をゲストにお迎えしました。緊張感のある中で各チームのプレゼンテーションが行われ、ゲストから有意義なコメントをいただきました。

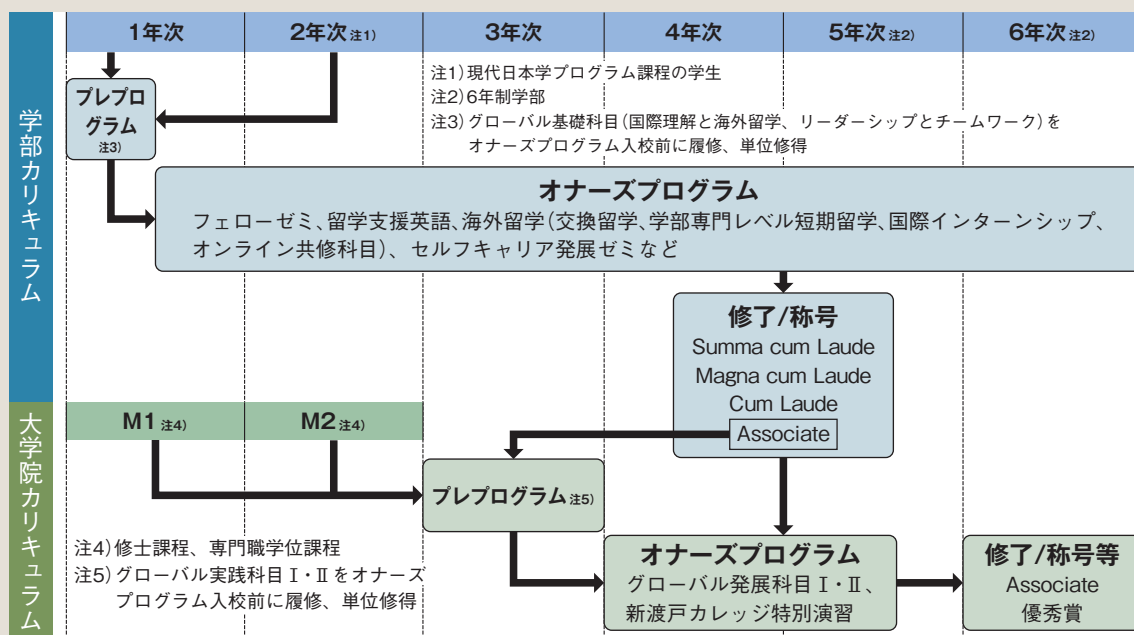


■メンターフォーラム

プログラムの構成の変更に伴い、これまで基礎プログラムで実施していたメンターフォーラムは、オナーズプログラム生を対象に実施されました。2024 年度は、6 月 16 日（日）と 12 月 14 日（土）に、それぞれ「Career building and entrepreneurship opportunities for degree holders」、「Job-hunting tips for degree holders: Valued skills and experience」をテーマとして開催し、いずれも 5 名のメンターにご参加いただきました。より有意義なイベントとなるようフォーラムの公開部分を従来のメンター講演からパネルディスカッション形式に変更したことで、これまで以上に活発な議論が行われました。メンター交流会では、より少人数のオナーズプログラム生が対象となったため、各学生は多くの質問・交流の機会を得ることができ、学生からは好評のコメントが寄せられました。



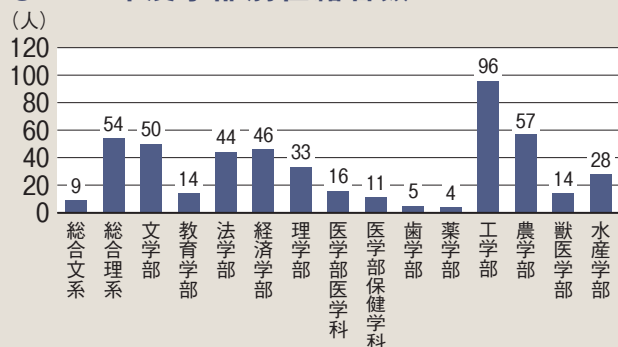
新 渡 戸 カ レ ヅ ジ 入 校 か ら 修 了 ま で の 流 れ (2024 年 度 ~)



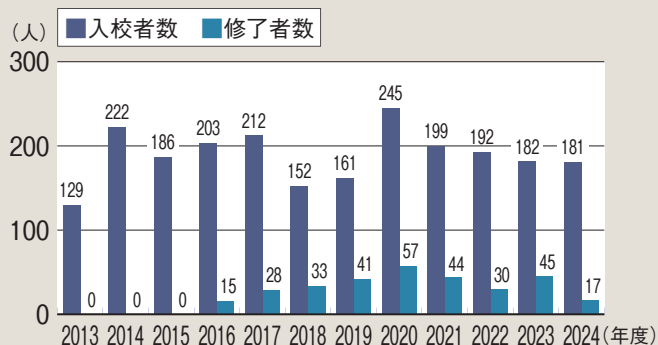
学部カリキュラム

*プログラム再編に伴い、2024年度から学部教育コースは学部カリキュラムに名称を変更しました。

2024年度学部別在籍者数(合計481名)



入校者数と修了者数



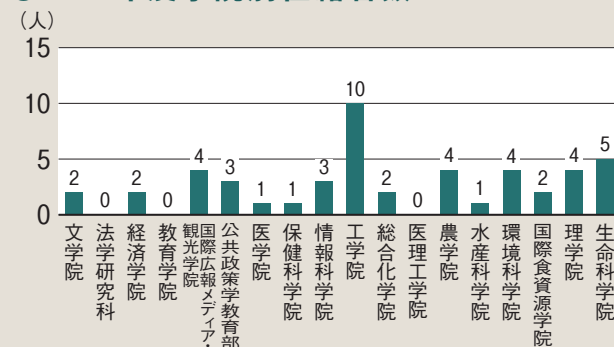
修了者の進路(2024年度)

就職(一般企業)	2名
進学(本学大学院)	12名
留学・研修参加	2名
未定	1名

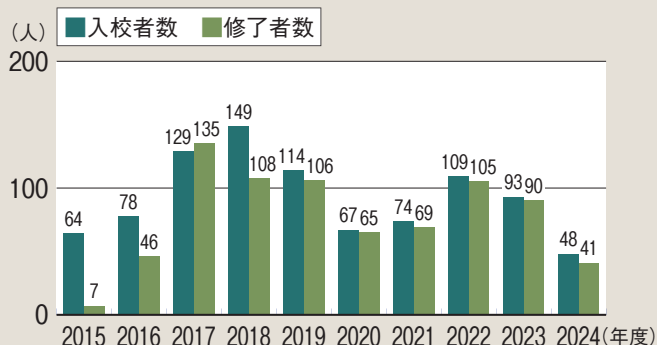
大学院カリキュラム

*プログラム再編に伴い、2024年度から大学院教育コースは大学院カリキュラムに名称を変更しました。

2024年度学院別在籍者数(合計48名)



入校者数と修了者数



修了者の進路(2024年度)

本学大学院在学中	27名
就職(一般企業)	7名
進学(本学大学院博士後期課程)	5名
進学(本学以外の大学院)(国外)	1名
未定	1名

フェロー・メンターの紹介

「言語化のすゝめ」



村山和佳

フェロー

日本工営株式会社
流域水管理事業本部
農村整備部

私が担当している「セルフキャリア発展ゼミ」では、学生同士のグループセッションやフェローとの面談などを通じて、自分の将来像を描き、そこに向けて必要なアクションを実行していきます。

その過程で一番大切なことは「言語化」することだと考えています。

「自分のやりたいことが漠然としている」「不安で一步が踏み出せない」「学生のうちに何をやっていいかわからない」。そんな思いを、まずは言葉にしてみる。そして、それぞれ違った悩みや不安を抱える仲間たちと共有し、アドバイスをもらい、行動に移していく。その積み重ねが、大きな力になります。

私自身もゼミを通じて自分のキャリアを振り返り、自分が何を目標としているのかを改めて見つめ直すことができました。

あまり難しく考えすぎず、まずは自分の思いを言語化して、周りに伝えるところから始めてみましょう。それが思考の整理になり、コミュニケーションにも繋がることで、あなたの学生生活をより深く、豊かなものにしてくれるはずです。

フェローとして、みなさんが迷ったり立ち止まったりするときに、ともに考え、一緒に前に進む伴走者でありたいと思っています。

広い視野で「どうありたいか」を編み直す



萩野 泉

フェロー・メンター

株式会社電通クロスブレイン
執行役員 CGO (Chief Growth Officer)

この5年間、私たちを取り巻く世界は一層せわしく、時に予想もしなかった方向へ動いてきました。新型コロナウイルスの拡大、生成AIの登場、国際秩序の揺らぎ——こうした不確実性の時代において、自分が「どうありたいか」を描くことは重要な試みの一つです。それは「どうあるべきか」という外からの規範に従う姿勢とは異なり、自分自身の価値観や希望を起点に未来を紡ぐ営みです。

私自身、かつてカメルーン共和国で狩猟採集民の研究に携わりました。自分とは異なる生活様式や価値観に触れた経験は私の思考の枠を揺さぶり、未知に出会い、受け入れる大切さを教えてくれました。その感覚は今も学びや仕事の基盤になっています。

新渡戸カレッジ大学院カリキュラムはすべてのプログラムが英語で開講され、多様な国際的バックグラウンドと学問的専門性を持つ学生が集まります。この学びの場は、国や地域、分野の境界を越えて互いに視野を広げる、かけがえのない機会であり、自らが「どうありたいか」を問い直し、新しい発想を引き出す源泉となります。

「人はインプットしたものしかアウトプットできない」と言われます。しかし、アウトプットはインプットの単なる写しではありません。取り込んだ知識や経験を自分なりに組み合わせ、編み直すことで、誰も見たことのない発想やアイデアを生み出すことができます。新渡戸カレッジにおける学びや出会いが、自らの「どうありたいか」を描き、これからの社会に価値を生み出すきっかけとなることを心から期待しています。

フェロー&メンター

フェロー

石川めぐみ

CJ コミュニケーション 代表

石川裕一

エナライン(株) 会長
ジョンソンコントロールズ(株)
取締役

伊藤 慎

アルジェニクスジャパン(株)
神経疾患領域 マーケティング部門
アシニエイトディレクター

上田英樹

(株)テクノラボ 代表取締役社長

大友俊彦

中外製薬(株) オンコロジー
ライフサイクルマネジメント部長

多田幸雄

(株)双日総合研究所 相談役
長崎大学経済学部客員教授

萩野 泉

(株)電通クロスブレイン 執行役員
CGO (Chief Growth Officer)

日野峰子

会議通訳者

廣重勝彦

北海道大学 東京オフィス 副所長
(ファンドレイジングマネージャー)
(一社)日本社債調査センター
代表理事

三村直己

(株)ロジック・リサーチ
シニアコンサルタント

村山和佳

日本工営(株)
流域水管理事業本部
農村整備部

森 順子

(株)ハッピーアロー 代表取締役

メンター

石川憲一

(株)日本医療器研究所
代表取締役社長

OFOSU-TWUM Eric

(株)日立製作所 研究員

黒田垂歩

ブラックフィールズ
コンサルティング CEO

佐賀美紅

(株)日立製作所 人事企画部
タレントマネジメントグループ

佐伯百合子

(株)資生堂 研究員

中島 徹

15th Rock
Founder & General Partner

中原 拓

メタジェンセラピューティクス(株)
代表取締役社長

萩野 泉

(株)電通クロスブレイン 執行役員
CGO (Chief Growth Officer)

藤井幸大

サンマルコ食品(株)
代表取締役社長

和田義明

前衆議院議員

教員からのメッセージ

学部カリキュラム



川谷 維摩

高等教育推進機構・新渡戸カレッジ教育研究部／
特任助教

新渡戸カレッジでは、経験豊富なフェローから専門的な指導や助言を受けながら、自分の関心を深めたり将来のキャリアを考えたりすることができます。また、チューターとして後輩にとって身近なロールモデルを示すとともに、学生同士の縦と横のつながりを築くチューター制度もあります。こうした多様な人との交流が、学びを支える大きな力となり、互いに刺激し合いながら成長できる新渡戸カレッジを形づくっているのだと感じています。そのような新渡戸カレッジの良さを、これからも大切にしたいと考えています。

大学院カリキュラム



橋本 勝文

大学院工学研究院・准教授
グローバル実践科目Ⅱ（冬ターム）担当

新渡戸カレッジで培う国際的な異分野融合の視点と、多様な課題を発見し解決へ導く力は、学術研究の進展や技術開発の革新に直結する重要な素養です。知識や経験に基づく理解と情報を結びつけることで、課題の発見と解決が可能となります。人類が安全で安心できる豊かな社会を築くためには、柔軟な発想と実践的な行動力が不可欠です。失敗を恐れず挑戦することを使命とする姿勢が、次の時代を切り拓く原動力となり、世界を前進させることを心から期待しています。

2025年度 新渡戸カレッジ担当教員

ラファイ ミシェル LA FAY Michelle	副校長（副学長・大学院文学研究院 教授）
谷 博文	教頭（大学院工学研究院 准教授）
伊 藤 秀 臣	教育支援責任者（大学院理学研究院 准教授）

学部カリキュラム担当教員	
亀 野 淳	全学教育科目（大学と社会）企画・実施、 「新渡戸学（フェローゼミ）」担当、学部カリキュラム キャリア支援 （キャリアセンター長 高等教育推進機構 教授）
内 田 治 子	「グローバル基礎科目」企画・実施（高等教育推進機構 准教授）
野 澤 俊 介	「新渡戸学（フェローゼミ）」担当（高等教育推進機構 准教授）
山 畑 倫 志	「新渡戸学（フェローゼミ）」担当（高等教育推進機構 准教授）
ショウ ラン 肖 蘭	「新渡戸学（セルフキャリア発展ゼミ）」企画・実施、海外留学 （高等教育推進機構 講師）
ジョン ハン 鄭 漢 模	「グローバル基礎科目」・「新渡戸学（フェローゼミ）」担当 （高等教育推進機構 講師）
畑 中 貴 美	「新渡戸学（フェローゼミ）」企画・実施（高等教育推進機構 特任講師）
田 中 孝 平	「グローバル基礎科目」担当（高等教育推進機構 助教）
川 谷 維 摩	「新渡戸学（フェローゼミ）」企画・実施、 「グローバル基礎科目」・「新渡戸学（セルフキャリア発展ゼミ）」担当、 行事企画（高等教育推進機構 特任助教）

大学院カリキュラム担当教員	
ロマーエヴァ マリーナ LOMAEVA Marina	大学院カリキュラム 授業実施（高等教育推進機構 特任助教） ※ 2025年7月から北極域研究センター 特任助教
ホイットフィールド デール リー WHITFIELD Dale Lee	大学院カリキュラム 授業実施（高等教育推進機構 特任助教）
サウナワラ ユハ SAUNAVAARA Juha	「グローバル発展科目Ⅰ」（春ターム）担当 （北極域研究センター 准教授）
オスピナ リカルド OSPINA Ricardo	「グローバル発展科目Ⅱ」（夏ターム）担当（大学院農学研究院 助教）
岩 崎 晋 弥	「グローバル実践科目Ⅱ」（夏ターム）担当 （大学院地球環境科学研究院 助教）
スクリムshaw トラビス SCRIMSHAW Travis	「グローバル実践科目Ⅱ」（夏ターム）担当（大学院理学研究院 准教授）
ボメゴウダ シッドアバサヴェ ゴウダ BOMEGOWDA SIDDABASAVE GOWDA	「グローバル発展科目Ⅰ」（秋ターム）担当 （大学院保健科学研究院 准教授）
三 浦 篤 志	「グローバル発展科目Ⅱ」（冬ターム）担当（大学院理学研究院 准教授） ※ 2025年10月から北見工業大学 教授
橋 本 勝 文	「グローバル実践科目Ⅱ」（冬ターム）担当（大学院工学研究院 准教授）



新渡戸カレッジ生へのご支援をお願いします。

「北大フロンティア基金 新渡戸カレッジ支援事業」へのご寄附については、新渡戸カレッジ生の『海外留学支援』『修学支援』に活用させていただいております。

フロンティア基金新渡戸カレッジ支援事業へアクセスして、新渡戸カレッジ生を応援!!



新渡戸カレッジ同窓生の皆さんへ 北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワークへご登録ください

同窓ネットワークは、新渡戸カレッジの在校生と修了生、フェロー、メンター、教員間の相互交流の基盤となります。



- 北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク入会フォーム
(<https://ws.formzu.net/fgen/S23755582/>) または QR コードからご登録をお願いします。
- 得られた情報は、個人情報保護法に基づいて、当ネットワークが厳格に管理し、本人の同意なく外部に提供されることはありません。



新渡戸カレッジウェブサイト

<https://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>



Facebook

「Hokkaido University Nitobe College Alumni Network/
北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク」
<https://www.facebook.com/groups/hokudai.nitobe.alumni.network/>



北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク (HU-NCAN) ACROSS 編集長 山畑倫志 (高等教育推進機構・国際教育研究部 准教授)

北海道大学新渡戸カレッジ推進事務室 〒060-0817 北海道札幌市北区北17条西8丁目 TEL: 011-706-5414 E-mail: ncan@academic.hokudai.ac.jp

2025年12月1日発行